

# 日本人の宗教的態度とその精神的健康 への影響

—ISSP調査の日米データの2次分析から<sup>1)</sup>—

金見 恵

## 序論

本研究の目的は、大規模な社会調査データの2次分析を通じて、日本人の宗教的態度や宗教行動についてアメリカ人との比較を試み、その性質を明らかにすること、および、宗教が両国の人々の精神的健康（主観的幸福感）にどのような影響を及ぼすのかを検討すること、である。

### 宗教が身体的・精神的健康に与える影響に関する欧米の知見

欧米、特に「宗教国家」とも呼ばれるアメリカ合衆国においては、宗教が人々の心理や行動にどのような影響を及ぼすのかについて、これまで数多くの実証的研究が行われてきた。そこで近年明らかになったのは、宗教への関与が高いほど生活満足度や幸福感や自尊心などの精神的健康が高いという、宗教が持つポジティブな効果である（Gartner, Larson, & Allen, 1991; Krause, 1995; Larson, Sherrill, Lyons, Craigie, Thielman, Greenwold, & Larson, 1992; Levin & Markides, 1986; Poloma & Pendleton, 1990）。例えば Batson, Schoenrade, & Ventis (1993)は、115件の研究結果のメタ分析を行い、内発的な宗教性を持つ人々は、そうでない人々よりも精神的健康度が高いことを見出している。また、宗教が身体的な健康に与える影響も見出されている。Koenig, Smiley & Gonzales (1988) や Levin & Schiller (1987) は、熱心な信者は喫煙や飲酒などの面で健康的な習慣を身につけているため、身体的に健康で寿命が長い傾向があることを示している。

なぜ上記のように宗教と精神的健康との間に正の関連が見られるのかについては、いくつかの可能性が指摘されている（Levin & Chatters, 1998）。そ

の一つが、宗教の教えの内容やそれに伴う祈りの行動が、人の内的統制感を高めたり、希望などの正の感情をもたらしたり、死の恐れを和らげたり、心の平穏をもたらしたりするなど、直接的に精神的健康を向上させるという心理的なプロセスの存在の可能性である (Batson et al., 1993; McIntosh & Spilka, 1990)。また、教会のメンバーになったり、礼拝などの集まりに出席したりといった宗教団体への関与が、団体からの様々な直接的援助や他のメンバーとの交流などを通じた社会的サポートをもたらすため、結果として高い精神的健康をもたらしているという社会的プロセスが存在する可能性もある (Fischer, 1982; Idler, 1987; Krause, Ellison & Marcum, 2002; Miller, 1998)。

さらに、宗教の緩衝効果に関する研究知見も数多く得られている。通常、病気などの困難や近親者の死といったネガティブな出来事を経験すると幸福感が低下するが、そうしたネガティブ経験の負の影響を宗教が和らげるというものである。例えば Park, Cohen, & Herb (1990) は、プロテスタントの信者において、内発的な宗教性がネガティブ経験の抑うつ傾向への影響を緩和することを見出した。また、低収入の人々や配偶者と死別した女性たちには、そうした状況にいない人たちに比べて、その困難な状況への対処法として「祈る」という宗教的行為を用いた人が多いという報告もなされている (Veroff, Douvan, & Kulka, 1981)。

## 日本における宗教的態度とその心理学的研究

以上の欧米の状況と対照的に、日本では、宗教の心理学的研究はこれまで盛んに行われてきたとは言い難い。恐らくその背景には、多くの人々が自分は宗教を持っているとは考えていないという現状があるだろう。最近行われた大規模な社会調査の結果からもそのことが伺える。例えば、2000年に実施された第1回日本版総合的社会調査 (JGSS-2000) では、「信仰している宗教がある」と回答した人は9.5%に過ぎない。また、1991年実施の世界価値観調査 (World Values Survey, 1991) では「私は信心深い (I am a religious person.)」との項目に「はい」と答えた日本人の割合は、米国・イタリア・スイスなど11ヵ国中最下位の26%であった。このように、世界的に見ても日本における宗教の重要性は、少なくともデータ上は低いことが示されてきた。こうした背景の下、日本の心理学において宗教は基本的には人の心や振る舞いとは無関係な現象、あるいは「非科学的な」現象として長年輕視され、見

落とされてきたのである（金児、1997）。

しかし実際には、初詣や墓参り、冠婚葬祭などの行事は言うまでもなく、「しばしば家の仏壇や神棚などに手を合わせる」人が52.3%、「身の安全、商売繁盛、入試合格などの祈願をしに行く」人が30.7%（1995年の読売新聞調査）いるように、宗教は日本人の生活に深く根を下ろしている。さらに近年、そうした宗教的行動が日本人の心理に影響を与えているとの指摘がなされている。金児（1997）は、日本人が単に自分自身をどのくらい「信心深い（religious）」と思っているかだけでなく、彼らの宗教に対する信念体系がどのような構造を持つかを検討した。分析の結果、日本人の宗教的態度は、「向宗教性」（宗教に対する肯定的な態度）、そして当人もそれを宗教であるとは意識しない宗教性である「加護〔報恩〕観念」（風俗や年中行事としての軽い宗教に親しみを感じ、自然に敬虔な気持ちを持つ態度）と「靈魂〔応報〕観念」（霊的存在や人知を超えた存在に対する信仰）の3つの潜在因子によって規定されていることが見出された。さらに金児・渡部（2003）は、大学生を対象にした調査から、神棚や仏壇の有無が「先祖の霊を祭る」とか「身の安全や入試合格などを祈願しに行く」等の宗教行動や宗教的態度に影響を及ぼし、さらには向宗教性が「浄福な来世」の存在の信念を含む肯定的な死観を促進させたり、加護観念が死の不安・恐怖を低減させたりすることを見出した。しかし、こうした日本人の宗教性と精神的健康の関係に関する研究はまだ緒に就いたばかりであり、実証的知見の蓄積は十分であるとは言えない。さらに、宗教のような広い社会で見られる文化現象を捉えるためには、無作為抽出法によって選ばれた代表性のあるサンプルを対象に収集したデータを分析することが望ましいが、そのようなランダム・サンプルを用いた全国規模の社会調査データによる研究はほとんどないのが現状である。

## 本研究の目的

以上より、本研究では1998年に実施されたInternational Social Survey Programme (ISSP)<sup>2)</sup>「宗教意識」調査（その2）のデータを用い、これまで宗教の効果が多く見出されてきたアメリカと日本について2次分析を行った。先述の欧米の知見を踏まえ、以下の4点を検証した：1) 日米両国における宗教的態度および宗教行動について基礎的データを概観、2) 宗教的態度や宗教行動に関する項目に関して因子分析を施し、日米の宗教的態度（信仰）の

構造の差異を検討、3) 信仰する宗教を持つことや信仰の程度と主観的幸福感との関連を比較検討、4) ネガティブな出来事を経験している人にとって特に宗教が効果を持つのか、すなわちネガティブ経験が主観的幸福感に及ぼす負の影響を宗教が緩和するのかどうかを検討。

## 方法

### データ

International Social Survey Programme (ISSP) の1998年調査“Religion II”のうち日本とアメリカのデータを使用し、2次分析を行った。日本データは、16歳以上の男女を対象に層化無作為二段階抽出法によってサンプリングされた1,800人のうち、回答のあった1,368人（回収率76.0%、平均年齢47.10歳）が分析対象であった。アメリカデータは、18歳以上の男女を対象に多段確率抽出法によってサンプリングされた2,311人のうち、回答のあった1,284人（回収率55.6%、平均年齢45.15歳）が分析対象であった。

### 使用した変数

- ① 主観的幸福感：「あなたの今の生活は、全体として幸せだと思いますか。」（「1. とても幸せである」～「4. まったく幸せでない」の4点尺度。分析には、得点が高いほど幸福感が高くなるように反転して使用。）
- ② 信仰する宗教の有無：「あなた自身は、何か宗教を信仰していますか。」との問に対し、信仰する宗教を挙げた場合は「宗教あり」、「宗教を信仰していない」と回答した場合は「宗教なし」とした。
- ③ 信仰心：「あなた自身には信仰心や信心がありますか。」（「1. とてもある」～「7. まったくない」の7点尺度。分析には反転して使用。）
- ④ 宗教団体への信頼：「寺、神社、教会などの宗教団体を、あなたはどのくらい信頼していますか。」（「1. 非常に信頼している」～「5. まったく信頼していない」の5点尺度。分析には反転して使用。）
- ⑤ 超自然観念：死後の世界、天国、地獄、宗教的奇跡について「あると思いますか。」（1. 「絶対にある」～「4. 決してない」の4点尺度。分析には反転して使用。）
- ⑥ 宗教行動：「神様や仏様を拝んだり、祈ったりすることがどのくらいあ

りますか。」「礼拝や参拝以外に、神社、寺、教会などの行事や活動に参加することがどのくらいありますか。」「神社、寺、教会などへの礼拝や参拝にどの程度行きますか。ただし、初詣や冠婚葬祭は除きます。」「神社、寺、教会など宗教団体の活動について、この12ヶ月の間に何回ボランティア活動をしましたか。」

- ⑦ 社会階層意識：「あなたの生活程度は、世間一般の人と比べて、次のようにわけるとどれに入ると思いますか」（日本：「1. 下」～「5. 上」の5点尺度、アメリカ：“1. lower class”～“4. upper”の4点尺度。）
- ⑧ その他：性別、年齢、婚姻状態、学歴（通学年数）。

## 結果

### 日本人とアメリカ人の宗教的態度

まず、日米両国における宗教的態度および宗教行動について基礎的データを概観した。日本において、信仰する宗教を挙げた回答者は34.8%（仏教系29.8%、神道系1.8%、キリスト教系1.8%、その他1.5%）、「宗教を信仰していない」と答えた回答者は56.4%であった。アメリカの回答者では、信仰する宗教を挙げた人は85.4%、信仰する宗教がない人は13.7%であった。次に、日本とアメリカの信仰心の差についてt検定を行った結果、アメリカの方が日本よりも有意に信仰心が高かった（日本： $M=3.47$ ,  $SD=1.67$ 、アメリカ： $M=4.84$ ,  $SD=1.34$ ,  $t(2491.10)=22.96$ ,  $p<.001$ ）。また、信仰する宗教の有無別の、信仰心の分布を図1に示した。「宗教を信仰していない」人のうち、信仰心や信心が「とてもある」「かなりある」「まあある」と回答した人は、日本では12.3%、アメリカでは21.7%いた。

「死後の世界」「天国」「地獄」「宗教的奇跡」があると思うかという超自然観念を尋ねた結果をグラフにしたものが図2である。いずれの項目についても、アメリカの方が日本人よりも、その存在を信じる程度は有意に高かった（それぞれ $t(2110.97)=20.91$ ,  $p<.001$ ;  $t(2114)=29.40$ ,  $p<.001$ ;  $t(2065.24)=22.76$ ,  $p<.001$ ;  $t(2041.66)=28.64$ ,  $p<.001$ ）。また、「わからない」との回答が日本で顕著であり、アメリカでは多くても8%であったのに対し、日本ではどの項目においても30%前後も見られた。

さらに、宗教行動に関する項目の単純集計を図3～6に示した。「神仏を拝

んだり祈ったりする頻度」については、週に数回以上そのような行動を行う人は日本で30%に満たなかったのに対し、アメリカでは約60%いた。「礼拝や参拝以外の、寺、神社、教会などの行事や活動」に月に1回以上参加する人は、日本では3.9%、アメリカでは28.6%であった。また、「神社、寺、教会などへの礼拝や参拝に行く頻度」が月1回以上の人、日本では7.1%、アメリカでは47.6%であった。「この12ヶ月の間に、神社、寺、教会など宗教団体のボランティア活動をした頻度」についても聞いているが、日米双方ともに「このような活動はしなかった」という人が過半数を超えており、一度でもボランティア活動をした人は日本で9.6%、アメリカで35.8%であった。以上より、神仏を拝んだり祈ったりといった行動は日本でも何らかの形で行われているようであるが、神社、寺、教会といった、いわゆる宗教団体に参加したり訪れたりするような行動は日本では特に少なかった。

最後に、「寺、神社、教会などの宗教団体への信頼」についてt検定を行った結果、アメリカの方が日本人よりも宗教団体への信頼が有意に高かった（日本：M=2.07、SD=0.86、アメリカ：M=3.31、SD=0.97、 $t(2382.413) = 33.32, p < .001$ ）。

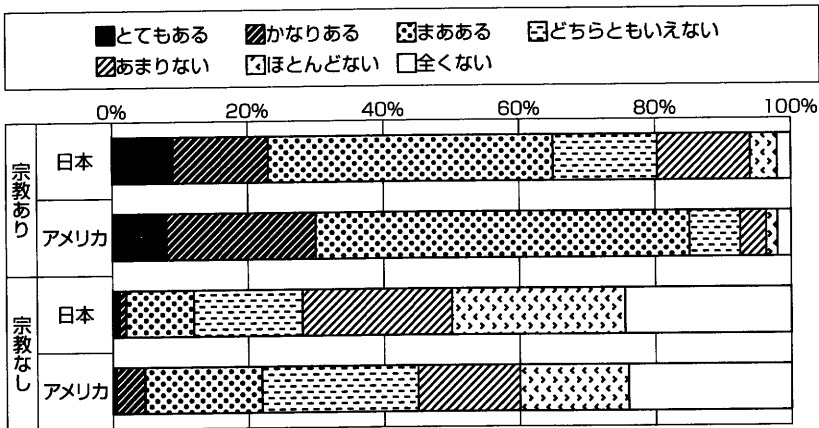


図1 信仰する宗教の有無と信心の程度

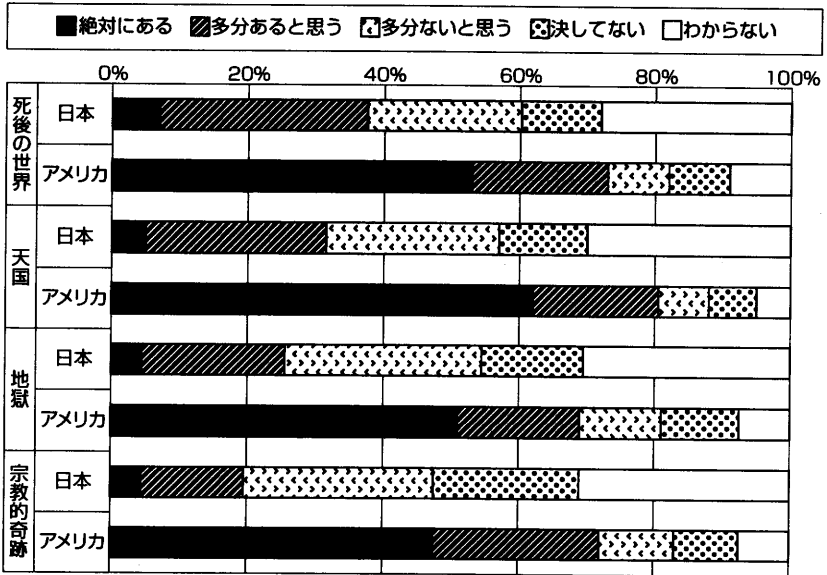


図2 超自然観念

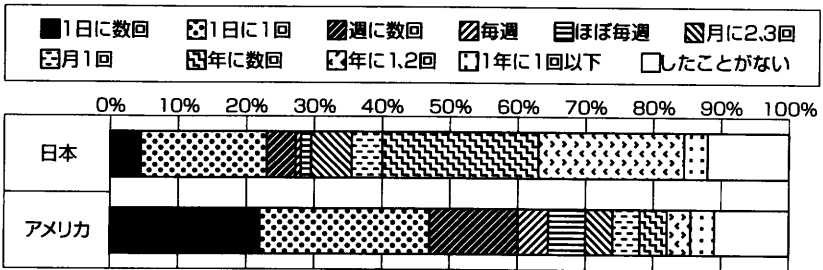


図3 神仏を拝む・祈る頻度

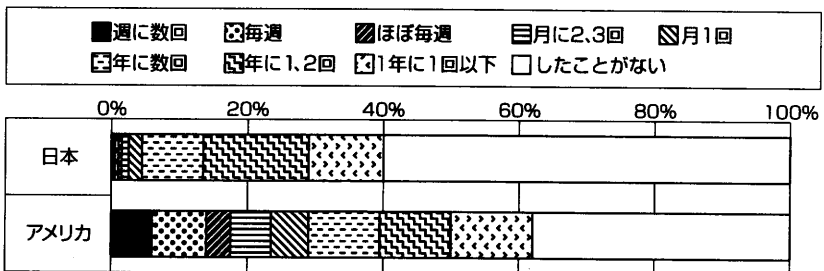


図4 礼拝や参拝以外の寺、神社、教会の行事への参加

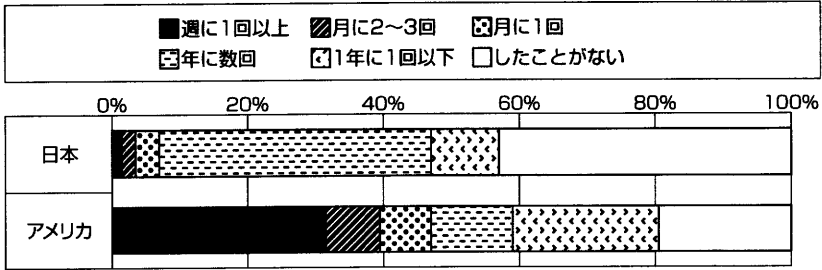


図5 神社、寺、教会へ行く頻度（初詣や冠婚葬祭は除く）

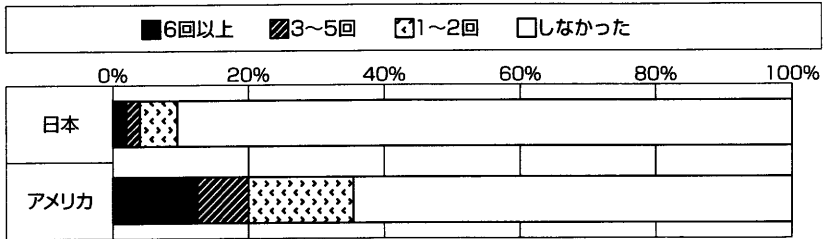


図6 宗教団体へのボランティア活動

### 日米における宗教的態度の因子構造

上記の信仰心、超自然観念<sup>3)</sup>、宗教行動、宗教団体への信頼に関する10個の宗教的態度項目について、因子分析（主成分法）を施し、バリマックス回転を加えた。その結果、日本とアメリカで因子構造に違いが見られた（表1、表2）。日本においては、「信仰心」、「宗教団体への信頼」、「宗教行動（4項目）」の計6項目が第I因子に負荷量が高かった。これらの項目はいずれも、主に宗教施設や団体への関与という意味が含まれると考えられるため、この因子を「制度的宗教関与」と命名した。第II因子に負荷が高かったのは、「死後の世界／天国／地獄／宗教的奇跡があると思うか」の4項目であったので、この因子を「超自然観念」と命名した。日本で第I因子と第II因子が明確に分かれたのに対し、アメリカでは多少複雑な因子構造が得られた。第I因子に負荷量が高かったのは、「信仰心」、「宗教教団への信頼」、「神様や仏様への拝みや祈り」、および日本では第II因子に負荷の高かった「死後の世界／天



国／地獄／宗教的奇跡があると思うか」の計7項目であった。これらの項目は個人的心理的な宗教的態度を表していると考えられるため、この第I因子を「個人的信仰心」と命名した。一方、「信仰心」と「宗教団体への信頼」と「神様や仏様への拝みや祈り」は第II因子でも負荷が高く、その他「宗教団体へのボランティア活動」、「礼拝や参拝以外の宗教団体の活動への参加」、「礼拝や参拝への参加」の項目で高い負荷が見られた。これらの項目は、日本の第I因子「制度的宗教関与」とほぼ同様の構成であるため、第II因子は「制度的宗教関与」とした。

注目すべきは、日本においてはほぼ独立した2つの因子が抽出されたのに

表1 宗教的態度項目の因子分析（日本）

	第I 因子	第II 因子	共通性	平均標準偏差	
I：制度的宗教関与					
信仰心や信心がありますか	.72	.23	.58	3.47	1.67
寺、神社、教会などの宗教団体をどのくらい信頼していますか	.55	.18	.33	2.09	0.86
この12ヶ月の間に、神社、寺、教会など宗教団体のボランティア活動を何回しましたか	.56	-.07	.32	1.16	0.54
神様や仏様を拝んだり、祈ったりすることがどのくらいありますか	.73	.13	.55	5.21	3.20
礼拝や参拝以外に、寺、神社、教会などの行事や活動に参加することがどのくらいありますか	.78	.05	.61	1.91	1.36
神社、寺、教会などへの礼拝や参拝にどの程度行きますか（初詣や冠婚葬祭は除く）	.78	.04	.62	2.19	1.17
II：超自然観念					
死後の世界はあると思いますか	.06	.87	.77	2.94	1.16
天国はあると思いますか	.05	.93	.87	2.80	1.12
地獄はあると思いますか	.02	.91	.83	2.67	1.10
宗教的奇跡はあると思いますか	.33	.62	.49	2.48	1.13
因子寄与	3.01	2.95			
説明率（%）	30.10	29.54			

表2 宗教的態度項目の因子分析 (アメリカ)

	第I 因子	第II 因子	共通性	平均標準偏差	
I: 個人的信仰心					
信仰心や信心がありますか	.61	.51	.64	4.84	1.34
寺、神社、教会などの宗教団体をどのくらい信頼 していますか	.47	.38	.36	3.32	0.98
死後の世界はあると思いますか	.69	.07	.49	4.04	1.31
天国はあると思いますか	.88	.18	.80	4.26	1.20
地獄はあると思いますか	.81	.12	.68	3.86	1.43
宗教的奇跡はあると思いますか	.80	.21	.69	3.95	1.30
神様や仏様を拝んだり、祈ったりすることがどの くらいありますか	5.9	.48	.58	7.87	3.30
II: 制度的宗教関与					
この12ヶ月の間に、神社、寺、教会などの宗教団 体のボランティア活動を何回しましたか	.07	.83	.69	1.71	1.08
礼拝や参拝以外に、寺、神社、教会などの行事や 活動に参加することがどのくらいありますか	.16	.86	.76	3.48	2.66
神社、寺、教会などへの礼拝や参拝にどの程度 行きますか (初詣や冠婚葬祭は除く)	.28	.82	.75	3.64	1.98
因子寄与	3.61	2.81			
説明率 (%)	36.07	28.18			

対し、アメリカの場合は2つの因子の両方に負荷が高い項目がいくつか見られたことである。つまり、日本においては、いわゆる「信仰心」は宗教団体への関与と強く結びついており、死後の世界や天国・地獄といった超自然的現象の存在を信じることは別次元であることを示している。一方、アメリカでは、信仰心は宗教団体への関与とも結びついているが、同時に超自然的現象の存在を信じることも関連があったのである。

### 宗教が主観的幸福感に与える影響

ここまで、日米における宗教的態度について概観してきたが、次に、それが両国の人々の精神的健康にどのような影響を及ぼしているかを分析する。まず、宗教に対して肯定的・積極的な態度を持つことが、直接人々の心の平穏や幸福をもたらすという宗教の直接効果を検証した。まず、信仰する宗教を持っていること自体が高い主観的幸福感につながるかどうかを、デモグラフィック変数を統制した重回帰分析を用いて検討した(表3)。その結果、日本においては信仰する宗教の有無の効果は見られなかったが、アメリカでは正の効果が見られ、信仰する宗教を持っている方が主観的幸福感が高いことが示された。

さらに、宗教に対する態度と主観的幸福感との関連、すなわち果たして積極的な宗教的態度を持つ人ほど幸福感が高いのかどうかを検討するため、先の因子分析で抽出された宗教的態度に関わる2つの因子得点を独立変数(デモグラフィック変数を統制変数として投入)、主観的幸福感を従属変数とした重回帰分析を行った(表4)。その結果、日本においては第I因子「制度的宗教関与」も第II因子「超自然観念」のいずれも、主観的幸福感に対して有意な効果を持たなかったのに対し、アメリカでは第I因子「個人的信仰心」

表3 宗教の有無が主観的幸福感に与える影響(重回帰分析)

従属変数：主観的幸福感	日本 (N=1173)		USA (N=1248)	
	$\beta$	$\gamma$	$\beta$	$\gamma$
性別 (男=1、女=2)	.073**	.078**	.047	.031
年齢	-.047	-.029	.041	.094***
婚姻状態 <sup>a)</sup>	.149***	.145***	.245***	.281***
学歴	-.124	.060*	.070*	.121***
社会階層意識	.330***	.339***	.151***	.215***
信仰する宗教の有無 (無=1、有=2)	-.021	-.001	.088**	.118***
Adj-R <sup>2</sup>	.134***		.121***	

\*\*\* $p < 0.001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

a) 婚姻状態：「死別・離別・別居・結婚していない」=1、「結婚している」=2

表4 宗教的態度が主観的幸福感に与える影響（重回帰分析）

従属変数：主観的幸福感	日本 (N=1057)		USA (N=1049)	
	$\beta$	$\gamma$	$\beta$	$\gamma$
性別（男=1、女=2）	.055	.080**	.036	.026
年齢	-.109**	-.047	.023	.086**
婚姻状態 <sup>a)</sup>	.160***	.143***	.242***	.292***
学歴	-.034	.055 <sup>+</sup>	.054	.114***
社会階層意識	.314***	.333***	.158***	.214***
宗教的態度				
第 I 因子 （日：制度的宗教関与、米：個人的信仰心）	.057	.058	.085**	.072*
第 II 因子 （日：超自然観念、米：制度的宗教関与）	.015	.055	.152***	.208***
自由度調整済みR <sup>2</sup>	.134***		.146***	

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

a) 婚姻状態：「死別・離別・別居・結婚していない」=1、「結婚している」=2

と第 II 因子「制度的宗教関与」のいずれもが有意な正の効果を持っていた。

#### 宗教的態度が主観的幸福感に与える影響：ネガティブ経験に対する緩衝効果の検討

次に、近親者の死や貧困、病気などのネガティブな出来事が生じた時に、その心理的なインパクトを宗教が緩衝するかどうかを検証した。ここでは、調査項目の中から「配偶者との死別」と「社会階層意識」をネガティブ経験として取り上げた。「死別」については、宗教的信仰が幸福感に与える影響は、死別していない人よりも死別している人の方が相対的に高いだろうと予測する。また、社会階層については、一般にどの社会においても社会階層が低いことは望ましくないことであり、日米両国においては経済状態と相関が高いため、幸福感到強い影響を与える要因の一つと考えてよいだろう。しかし、ISSPの調査項目には経済状態の指標として本人の年収や世帯年収が含まれるものの、年収は回答者の性別や世帯人数・世帯構成によってその意味が異なってくるため、必ずしも客観的で良い指標とは限らない。そこで、今回は主観的な社会階層意識を用いて、自分が高い社会階層に属すると思ってい

る人は宗教的信仰の高低と幸福感とは関連がないが、低い社会階層に属すると考える人にとっては宗教的信仰が高いほど幸福感が高くなるだろうと予測する。

まず、死別に対する宗教的態度の緩衝効果を検討するため、配偶者と死別している群（死別群）と死別していない群（非死別群）に分け、第I因子、第II因子を独立変数、主観的幸福感を従属変数に重回帰分析を行った（表5）。統制変数として性別、年齢、学歴、社会階層意識を投入した。その結果、日本においては死別群でも非死別群でも宗教的態度の2つの因子の効果はいずれも見られず、仮説は支持されなかった。一方、アメリカにおいては、予測とは異なり、死別群では宗教の効果はなく、非死別群で宗教的態度の効果が見られた。つまり、死別している場合の方が宗教の効果は高くなるだろうとの仮説は支持されなかった。

次に、日本サンプルでは社会階層意識について「上」「中の上」と回答した人を高群、「中」と回答した人を中群、「中の下」「下」と回答した人を低群の3群に分割し、アメリカ・サンプルでは“middle”“upper”と回答した人を高群、“lower class”“working class”と回答した人を低群に分けた。そして、各群について宗教的態度の第I因子、第II因子を独立変数、主観的幸福感を従属変数に重回帰分析を行った（表6）。その際、統制変数として性別、年齢、学歴を投入した。その結果、日本サンプルでは、中群と高群では宗教的態度の効果はなかったが、低群では第I因子（制度的宗教関与）の正の効果が見られ、仮説を支持する結果となった。一方、アメリカ・サンプルでは、第II因子（制度的宗教関与）効果は低群と高群の両方で有意であったものの、第I因子（個人的信仰心）の効果は高群のみで見られ、仮説は支持されなかった。

表5 配偶者との死別に対する宗教の緩衝効果（重回帰分析）

従属変数：主観的幸福感	日本		USA	
	死別群 (n=61)	非死別群 (n=768)	死別群 (n=105)	非死別群 (n=495)
	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$
性別（男性=1、女性=2）	-.008	.041	-.097	.076
年齢	.052	-.110*	-.083	.009
学歴	-.212	.001	.153	.077
社会階層意識	.284*	.295***	.216*	.148**
宗教的態度				
第 I 因子 （日：制度的宗教関与、米：個人的信仰心）	-.016	.047	.046	.132**
第 II 因子 （日：超自然観念、米：制度的宗教関与）	.143	.034	.130	.183***
自由度調整済みR <sup>2</sup>	.080	.103***	.049	.083***

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

表6 社会階層意識に対する宗教の緩衝効果（重回帰分析）

従属変数：主観的幸福感	日本			USA	
	階層意識：低 (n=284)	階層意識：中 (n=617)	階層意識：高 (n=156)	階層意識：低 (n=530)	階層意識：高 (n=519)
	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$	$\beta$
性別（男性=1、女性=2）	.041	.058	.102	.065	.010
年齢	-.166*	-.086	-.201	.050	.001
婚姻状態 <sup>a)</sup>	.165**	.149**	.324**	.252***	.248***
学歴	-.056	.010	-.095	.043	.087*
宗教的態度					
第 I 因子 （日：制度的宗教関与、米：個人的信仰心）	.144*	.042	.048	.015	.158***
第 II 因子 （日：超自然観念、米：制度的宗教関与）	-.060	.039	.121	.128**	.183***
自由度調整済みR <sup>2</sup>	.025*	.018**	-.002	.089***	.132***

\*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

a) 婚姻状態：「死別・離別・別居・結婚していない」=1、「結婚している」=2

## 考察

本研究では、ISSPという大規模な社会調査データを用いて、日米の宗教的態度と、それが幸福感に与える影響を検討した。

### 日本人とアメリカ人の宗教的態度と因子構造

日本人とアメリカ人の回答の分布を比較した結果、従来の研究と一貫して、アメリカ人に比べて日本人は、信仰する宗教を持つ人が少ない、超自然観念が弱い、そして宗教行動を行っている人が少ないことが示された。だが、このことをもって、単純に日本人は宗教的ではないと判断するのは早計である。第一に、言うまでもなく、比較対象であるアメリカは他の諸外国と比較しても著しく宗教的な国である（石井、1997）ことに留意する必要がある。第二に、日本人の宗教性が、本調査の項目では捉えきれない、より非明示的なものである可能性が考えられる。それは、超自然観念に対して「わからない」と回答した人が非常に多かったことに特徴的に現れている。また、信仰する宗教については、「わからない」または「無回答」がアメリカでは0.9%に過ぎなかったのに対し、日本では8.8%とほぼ10倍であった。これらの回答は、日本人にとっては、宗教に関する質問は回答しにくいものであることを示唆している。これはおそらく、宗教を行っていてもそれを宗教的な行動だと意識することは少なく、身近な存在とは言えない宗教や超自然観念について考える機会が非常に少ないためであろう。また、宗教がない人の中で信仰心があると回答した人が12.3%いたことにも注目すべきであろう。割合としてはアメリカより低いものの、宗教がない人の数がアメリカに比べて著しく多いことを考えると、無視できない数である。さらに、アメリカでは「信仰心」が超自然観念とも宗教行動とも関連していたが、日本では「信仰心」と超自然観念が互いに独立であることが因子分析から明らかになった。これらの結果は、「あなたはどの程度信仰心を持っていますか」などの少数の質問の結果をもとに「宗教的である」とか「信仰心を持っている」と判断することの難しさ、「宗教」や「信仰」を測定する難しさを端的に表していると言える。

### 宗教が主観的幸福感に与える影響

宗教的態度が主観的幸福感に及ぼす影響については、アメリカ・サンプル

では両者に正の関連があるという先行研究と一貫した結果が得られたが、日本サンプルでは宗教的態度の効果は見られなかった。加えて、アメリカでは、個人的・心理的な信仰心を意味する「個人的信仰心」と、教会などの活動への参加といった「制度的宗教関与」の双方が主観的幸福感に対してそれぞれ独立な効果を持っていた。

アメリカにおいて、幸福感に対する個人的な信仰心と制度的な宗教の双方の効果が見られたのはなぜだろうか。個人的な信仰心については、信仰心が心の平穏をもたらすといった、先述の心理的なプロセスが働いていたと説明できるだろう。一方、制度的関与の効果については、教会とそこに集う人々のコミュニティに参加することにより、様々な社会的利益を得た結果、幸福感が増進するという社会的なプロセスが働いている可能性が考えられる。アメリカの教会では、日本では地域や職場等の社会集団で提供されているような社会的利益、例えば友人との交流や社会的な援助などが提供されているという指摘がある (Miller, 1998)。

一方、日本で宗教的態度と主観的幸福感に関連が見られなかったことは、宗教心が生活満足度や正の感情と関連を持たないという先行研究の知見と一貫する (金児, 1998)。しかし、幸福と不幸は必ずしも次元上の対極に位置するものではないことが知られているように (Diener & Larsen, 1993)、この結果は、宗教が人のネガティブな精神状態を改善する効果を持たないことまでは意味しない点には留意すべきである。例えば金児は、信仰心が生活満足度などに影響を与えないことを示した上記の研究で、向宗教性はネガティブな感情を減らし、感情バランスを維持するのに役立つこともまた見出している。すなわち、日本における信仰心は、積極的な幸福感の向上というよりも、むしろネガティブな感情状態を癒す機能を持っている可能性がある。今回用いたデータにはこうしたネガティブな精神的健康に関する項目が含まれていないため検証できなかったが、今後さらに検討が必要であろう。

### ネガティブ経験に対する宗教的態度の緩衝効果

ネガティブ経験に対する宗教的態度の緩衝効果は、日本における社会階層意識においてのみ予測を支持する結果が得られた。すなわち、階層意識が高い人と中程度の人では宗教的態度と幸福感に関連はなかったが、階層意識の低い人々では制度的宗教関与が高いほど幸福感が高かった。一方アメリカで



は、先行研究とは異なり、宗教の緩衝効果は見られなかった。その理由として考えられるのは、Park, et al. (1990) で緩衝効果が見られたのは内発的な宗教的態度であったが、本研究で用いられた宗教的態度に関する項目は必ずしも内発的宗教心を純粹に測定できておらず、外発的宗教性との区別がなされていないことである。また、死別については、死別群のサンプルが少なかったことに加え、その中には実際に死別してから何年も経っている人も含まれていたことも、その原因として考えられるだろう。この必ずしも最近起こった出来事ではないという点については、社会階層意識についてもあてはまる。とはいえ、日本の社会階層低群およびアメリカ・サンプルの社会階層低群で一貫して制度的宗教関与のみに効果が見られたとの結果は、社会階層が低いほど、超自然観念を持っているかどうかということよりも地域（神社、寺、教会やそのメンバーたち）からの現実的な社会的サポートの重要性が高いことによると解釈できる。今後は、宗教的態度や動機の諸側面を多次元的に捉える尺度を使用し、宗教の役割を検討していく必要があるだろう。

### 本研究の限界と展望

先述の金児（1997）の知見からも、いわゆる「熱心に宗教を信仰しているかどうか」だけでは日本人の宗教性は測れないことは明らかである。これは何も日本に限ったことではなく、それぞれの国にそれぞれの文化的背景があり、それに応じて様々な宗教性が存在するだろう。一つ一つの国の宗教的文化や信仰のあり方に即した質問項目をすべて網羅することはできないにしても、これまでの国際的な調査では、欧米の宗教文化を強く反映した理論や尺度が用いられている点には十分注意が必要である。例えば西脇（2001）は、Fowler（1981）の宗教性に関する普遍的な生涯発達理論を例に挙げ、この理論における鍵概念である“信仰”概念にもキリスト教バイアスが存在すると指摘している。さらに、そうしたデータを2次的に分析することには、検討したい概念を適切に抽出した項目がなければ他の代用可能な項目を用いざるを得ない等の様々な制限が伴うが、特に国際比較調査の場合には、できる限り多くの項目を用いて複合的に概念の抽出を試みるのが重要であろう。

【引用文献】

- Batson, C. D., Schoenrade, P. A., & Ventis, W.L. (1993). *Religion and the individual: A social-psychological perspective*. New York: Oxford.
- Diener, E. & Larsen, R. J. (1993). The experience of emotional well-being. In M. Lewis & J. M. Haviland (Eds.), *Handbook of Emotions*, pp.405-415. New York: Guilford.
- Ellison, C. G. (1993). Religious involvement and self-perception among Black Americans. *Social Forces*, 71, 1027-1055.
- Fischer, C.S. (1982). *To dwell among friends: Personal networks in town and city*. Chicago: University of Chicago Press.
- Fowler, J. W. (1981). *Stages of faith*. San Francisco: Harper & Row.
- Gartner, J., Larson, D. B., & Allen, G. D. (1991). Religious commitment and mental health: A review of the empirical literature. *Journal of Psychology and Theology*, 19, 6-25.
- Idler, E.L. (1987). Religious involvement and the health of the elderly: Some hypotheses and an initial test. *Social Forces*, 66, 226-238.
- 石井研士 (1997) データブック現代日本人の宗教—戦後50年の宗教意識と宗教行動 新曜社.
- 金児暁嗣 (1997) 『日本人の宗教性 —オカゲとタタリの社会心理学—』 新曜社.
- 金児暁嗣 (1998) 宗教と心理的充足感 濱口恵俊 (編著) 世界のなかの日本型システム (pp.301-329) 新曜社.
- 金児暁嗣・渡部美穂子 (2003) 宗教観と死への態度 大阪市立大学大学院文学研究科紀要「人文研究」、54、85-109.
- Koenig, H. G., Smiley, M., & Gonzales, J. A. P. (1988). *Religion, health, and aging: A review and theoretical integration*. Westport, CT: Greenwood Press.
- Krause, N. (1995) Religiosity and self-esteem among older adults. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, 50B, 236-246.
- Krause, N., Ellison, C. G., & Marcum, J. P. (2002). The effects of church-based emotional support on health: Do they vary by gender? *Sociology of Religion*, 63, 21-47.
- Larson, D. B., Sherrill, K. A., Lyons, J. S., Craigie, F. C., Jr., Thielman, S. B., Greenwold, M. A., & Larson, S.S. (1992). Associations between dimensions of religious commitment and mental health reported in the American

- Journal of Psychiatry and Archives of General Psychiatry: 1978-1989.  
*American Journal of Psychiatry*, 149, 557-559.
- Levin, J. S. & Chatters, L. M. (1998). Research on religion and mental health: An overview of empirical findings and theoretical issues. In H. G. Koenig (Ed.), *Handbook of religion and mental health* (pp.33-50). Academic Press.
- Levin, J. S. & Markides, K. S. (1986). Religious attendance and subjective health. *Journal for the Scientific Study of Religion*, 25, 31-40.
- Levin, J. S. & Schiller, P. L. (1987). Is there a religious factor in health? *Journal of Religion and Health*, 26, 9-36.
- McIntosh, D. & Spilka, B. (1990). Religion and physical health: The role of personal faith and control beliefs. *Research in the Social Scientific Study of Religion*, 2, 167-194.
- Miller, A. S. (1998). Why Japanese Religions Look Different: The Social Role of Religious Organizations in Japan. *Review of Religious Research*, 39, 379-389.
- 西脇良 (2001) ファウラーの信仰論について 白百合女子大学キリスト教文化研究論集, 2, 77-102.
- 大阪商業大学比較地域研究所・東京大学社会科学研究所編 (2002). 『日本版 General Social Surveys (JGSS) —JGSS 2000— 基礎集計表・コードブック』.
- Park, C., Cohen, L.H., & Herb, L. (1990). Intrinsic religiousness and religious coping as life stress moderators for catholics versus protestants. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 562-574.
- Poloma, M. M. & Pendleton, B. F. (1990) Religious domains and general well-being. *Social Indicators*, 39, 255-276.
- Veroff, J., Douvan, E. & Kulka, R.A. (1981), *The Inner American*. New York: Basic Books.

#### 【註】

- 1) 2次分析に当たり、東京大学社会科学研究所附属日本社会研究情報センターSSJデータ・アーカイブから「ISSP【宗教意識】調査(その2)、1998」(Zentralarchiv fur Empirische Sozialforschung)の個票データの提供を受けました。
- 2) ISSPは、国際比較を前提に毎年特定のテーマを設定して調査を実施し、データを公開している。現在の参加国は、日本を含め39カ国である。原則としてランダム・サンプルによる全国調査を行う等、調査法も可能な限り一貫させ比較可能なデータとなっている。こうしたデータの2次分析は、使用でき

る質問項目が限られているという限界はあるが、非常に有効な手段である。

- 3) 超自然観念については、「わからない」との回答が多く、欠損値として処理するのは問題があったため、回答をそれぞれ「決してない」=1、「たぶんないと思う」=2、「わからない」=3、「たぶんあると思う」=4、「絶対にある」=5の5点スケールに得点化し直した。欠損があまりにも多い場合には平均値を代入する等の対処が取られることがよくあるが、今回の場合は「わからない」を「どちらでもない」と同等のものとして扱った。
- 4) 非死別群は「現在結婚状態にある人」に限られ、離婚・別居している人および未婚の人は分析から除かれた。

(かねこ・めぐみ 研究拠点形成特任研究員)

---

# Religious orientation and its effects on psychological well-being in the United States and Japan: A secondary analysis of ISSP survey data

Megumi Kaneko

---

The purpose of the present study is to examine cultural differences in religious orientation and its effect on subjective well-being (SWB) between the United States and Japan. I performed a secondary analysis of American and Japanese responses in the 1998 International Social Survey Program (ISSP), "Religion II." The Japanese data were derived from a national probability sample of 1800 people (age 16+) and the US data from 2000 people (age 20+). The analyses revealed that, first, while 85.4% of American respondents answered that they were affiliated with specific religious denominations, only 34.8% of Japanese had religious denominations. Likewise, while 76.5% of Americans reported being either "extremely," "very," or "somewhat religious," only 32.0% of Japanese chose the same categories.

Second, different factor structures were obtained as to Japanese and American religiosity: Japanese religiosity consisted of "institutional religious involvement" and "supernatural beliefs," while American religiosity consisted of "personal religious involvement" and "institutional religious involvement."

Third, the results of multiple regression analyses showed that, in the US, those who were affiliated with a religious denomination had higher SWB than those who did not, and there was a positive relationship between the degree of religiosity and SWB. For Japanese, on the contrary, either affiliation with religious denomination or religiosity had no relationship with SWB.

Finally, we examined a buffering effect of religiosity for negative life experiences such as bereavement and lower perceived social class. The

results supported the expectation only for Japanese social class. Japanese with higher religiosity were happier than those with lower religiosity in the lower social class, while there was no such relationship in the middle and higher social classes. In terms of bereavement, the non-bereaved Americans with higher religiosity were happier than those with lower religiosity, whereas such relationship was not found for the bereaved Americans, contrary to the expectation. Also, there was no effect of personal religious involvement on SWB for the Americans with lower perceived social class.

These results empirically confirm that structure of religiosity and its influence on people's psychological health are different between the US and Japan. It is also pointed out that there are potential methodological problems associated with research on religion in Japan, such as how to capture indigenous and implicit forms of religiosity.